

学生および教職員の安否確認

(1) 学生の安否確認について

震災時、大学は春期休暇中であったが、学内にはサークル活動や研究室で実験等を行っていた学生が約200人いた。それらの学生を一時避難先である本館2階に収容した後、紙に手書きで学籍番号と名前を記入させ、人数把握と安否情報の収集を行った。その後も続々と学生が大学に避難してきたが、その都度情報を手書きの名簿に記入し、情報把握を進めた。

震災当日

大きな地震による混乱、続く余震への不安、食糧確保、避難者の受け入れ等、様々な課題があり、学生の安否確認まで手も頭も回らない状況であった。



本館1階に設けられた学生の安否確認受付。外来対応の必要から24時間体制で対応した。

ただ、実際には学外との連絡も断絶したこともあり、安否確認に対してはなすすべがない状況でもあった。

3月12日

夜が明けて情報が集まってくるにつれ、各地の深刻な津波被害、そして石巻市内の壊滅的な状況など、被害の甚大さが判明してきた。石巻をはじめ三陸海岸など沿岸部に在住する学生数を考えると、100人単位での学生死亡の可能性もあると覚悟した。

震災直後から電話やメール等の通信が不通だったが、天候の回復もあり日中に活動できるようになったことから、市内の学生から無事を知らせる情報が徐々に集まりだした。

専修大学(東京・神田)のホームページに学生・教職員に安否の報告を求める記事を掲出をした。

3月14日

本学においても本格的な安否情報の集計が始まった。手元に紙に出力された正確な学生名簿がなかったため、まずは、大学に寄せられた学生の手書き名簿を大学院生の協力のもとパソコンにデータ入力して集約しはじめた。それにより無事が確認された154人分の学生氏名のデータを作成すること

ができた。ちょうどこの日にソフトバンクの移動中継局が来学しサービスを開始していたので、オペレーターにお願いし、作成したデータを専修大学(東京・神田)にデータとして送信することができた。そのデータと専修大学(石巻専修大学東京事務所)に寄せられた情報を元に、専修大学(東京・神田)ホームページにおいて安否情報の公開が開始された。

安否情報のホームページで安否情報の提供を呼び掛けた事により、安否の判明した学生数は増えたが、通常の方法でデータを専修大学へ送信する方法がまだ復旧しておらず、事務用コンピュータも使用できない状況から、担当職員の私物パソコンでデータの管理を続けた。

3月15日

188人の無事が確認できた。相変わらず通信手段は限られていたが、この頃になると携帯電話のメールが時々届くようになってきた。そこで、パソコンで作成したデータをテキスト化し、携帯電話を使って専修大学への送信を試みた。通信の繋がりやすさを考慮して、データ送信作業は深夜に行い、何とかデータを送ることができた。

3月16日

日が経つにつれて大学に寄せられる情報も増えていった。学費担当者の端末のローカルフォルダに残っていた作業中のデータから、全学生の50音順のリストを作成した。リストをA3用紙48枚に印刷し、それに蛍光ペンでマークすることにより情報を可視化し、安否確認作業を進めた。これにより正確な氏名等に基づく安否情報の集約が可能となった。データの集計から362人の安否情報が確認できた。

3月18日

作成した362人分の安否情報をラジオ放送で流

すため、石巻市役所に臨時開設されていた「ラジオ石巻」に向かった。その途中、利府のグランディ21でボランティアをしていた大場靖彦特命教授より、初めて在学生の遺体発見の訃報が入った。やはりというか、ついにとという表現が正しいか、何とも言いえない悲しさを覚えた連絡であった。

3月19日

震災後の安否確認は、石巻専修大学のある石巻、専修大学神田校舎のある東京、そして仙台在住の教員により組織された仙台仮連絡所の3つの拠点で行っていた。各拠点では独自に学生の安否情報は持っていたが、データの共有はできていなかった。そこで、石巻からモバイル通信環境により、全学生の50音順リストを東京、仙台仮連絡所に送信して、データの共有を行った。また、学生自身の通信環境が復旧するに伴って、安否確認が大幅に進展した。

3月21日

1,675人の無事が確認できた。しかし、残念ながら3月20日に1人、3月21日に1人、3月22日には2人の学生のご父母から学生死亡の連絡が入った。

3月23日

多くの学生の安否情報を集めた仙台仮連絡所が、大学の通信環境・学内事務システムの回復により閉鎖された。仙台仮連絡所では約1,600人分の安否情報を集めた。その数は3つの拠点のうちで最大であった。

3月24日

3月11日現在の在籍者数に基づき、安否確認すべき学生が1,941人であることがこの時点でようやく確定した。この時点で無事を確認できた学生数は

1 その時、大学は

2 大学の被災状況

3 地震直後からの大学の対応

4 地域社会への貢献

5 各学部・委員会などの対応・動向

6 建物と地盤について

7 震災を振り返って

資料編

1,868人となった。死亡が確認された学生5人、残り68人の安否が不明であった。ここから、何としても3月中に学生全員の安否を確認するという決意のもと学内事務システムを使い確認の追い込みに入った。

復旧したキャンパス情報システムを使用し安否不明者に連絡を行ったところ、学生側の通信環境の復旧により多くの学生から返信が来た。連絡のない学生に対しては、父母の職場、自宅へ夜に電話をすることにより不明者数は減っていった。

3月29日

安否が不明だった学生の親から、祖母を助けに自宅に戻り、家ごと津波に流された旨の連絡が入った。なお、その学生の遺体は4月2日に発見された。それが最後の学生死亡の連絡であり、最終的には6人の尊い命が奪われたことが確認された。

3月30日

安否不明者は残り2人となった。2人の住所は石巻市内だったため、担当者が自宅を訪問することにした。1人の学生は自宅が津波で浸水し、固定電話、携帯電話も使用不能になっていたとのことで、訪問時には自宅の片づけを行っていた。最後の1名も自宅で確認できたことにより、全学生の安否確認

作業が終了した。

(2) 教職員の安否確認について

震災当日、学内には約70人の教職員がいた。春期休暇中だったため、大学内にいた教員は多くなかった。学内の教職員の安否確認は比較的スムーズに行われたが、当時学外にいた教職員の安否確認は、石巻専修大学および石巻市内の電話が不通となったため、すぐにはできなかった。ただし、教員の中には、東京の専修大学へ電話で連絡する者もあり、石巻専修大学に集まった情報と合わせ、教職員の安否情報も専修大学ホームページに公開した。それにより、教職員の安否を確認した家族・友人・知人も多かった。また、沿岸部や浸水地域に自宅を持つ教職員も多く、連絡が取れずに安否が心配されたが、最終的にはNTTが設置した仮設電話等を利用して連絡を取り、3月17日に教職員全員の無事が確認された。



本館南側入口に貼付けられた案内図

1 その時、大学は

2 大学の被災状況

3 地震直後からの大学の対応

4 地域社会への貢献

5 各学部・委員会などの対応・動向

6 建物と地盤について

7 震災を振り返って

資料編